

栽培漁業の研究開発と組織変遷を振り返って

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 水産研究・教育機構
	公開日: 2024-07-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中川, 亨
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009755

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



栽培漁業の研究開発と組織変遷を振り返って

生産環境部 資源増殖グループ主任研究員

中川 亨



私は平成31年3月末をもって定年となります。それを機会にこれまで私が行ってきた水産研究開発について少し振り返ってみたいと思います。

昭和57年4月に採用された社団法人日本栽培漁業協会屋島事業場勤務時には、ブリ、サワラ、トラフグ、クルマエビ、ガザミの大量種苗技術開発を行うと同時に、マナガツオ、マアジ、クエ、クロダイ、シロギス、ヒラメ、ヒゲソリダイ、ヒラマサ、マダコ、ミズダコの飼育手法の技術開発も手がけました。種苗生産への餌料利用として、枝角類の大量培養手法の技術開発にも成功し、魚類の餌料の安定供給に大きく貢献しました。また、ブリ資源添加技術開発において、標識放流試験により瀬戸内海東部海域における回遊状況を明らかにしました。

昭和63年9月に厚岸事業場に異動してからは、おもにマツカワ、ババガレイ、ケガニを担当し、大量種苗技術開発を行いました。また、ニシン、ハナサキガニでは大量種苗技術開発をサポートする形で携わり、タイヘイヨウオヒョウ、クロガシラガレイ、ホッカイエビの飼育手法の技術開発も行いました。甲殻類種苗生産の餌料として、珪藻の大量培養手法の技術開発も手がけ、ケガニのふ化幼生の育成に道筋をつけることができました。平成5年度から11年度までの間「沿岸漁場整備開発調査委託事業」を受け、ケガニ保護育成礁の開発を行い、天然海域におけるケガニの生態や構造物等との関係について多くの知見を得ることが出来ました(写真1)。

平成10年11月よりスタートした水産庁による日中栽培技術プロジェクトにクルマエビ、ヒラメの専門家として参画しました。中国山東省日照市にて活動し、現地の環境に適した栽培漁業技術の開発に貢献しました。さらに、シオミズツボムシ等の餌料培養およびイシビラメやバナメイエビの種苗生産指導にも尽力しました。

平成15年3月に帰国し、宮津栽培漁業センターに配属

されました。そこではアカアマダイ、ヒラメの大量種苗技術開発を行うとともに、若狭湾をモデル海域としたヒラメの放流技術開発に取り組みました。その活動の一環として日本海中西部海域の各府県との広域連携調査により、当該海域におけるヒラメの放流効果の解析を行いました。

平成21年4月に北海道区水産研究所厚岸庁舎に異動し、種苗放流および再生産の促進による沿岸資源の資源回復を目指し、道総研と連携してマツカワの放流技術開発および放流効果の解析を行いました。マツカワの種苗生産は昭和61年に日裁協厚岸事業場で最初に開発され、その後、ウイルス疾病の克服、遺伝的多様性を低下させない種苗生産方法の確立などに取り組み、漁獲量が1トン以下まで減少した状態から、平成18年には北海道栽培漁業振興公社の放流開始により年100万尾以上の放流が可能となり、漁獲量も放流魚が漁獲加入する2歳魚から150～200トンの水揚げが見られるようになりました(図1)。資源回復が確認されたことから平成24年度をもって厚岸庁舎におけるマツカワの放流技術開発事業は成功裏に幕を閉じました。他には、平成21、22年度に資源動向要因分析調査でサンマの飼育を、平成24年度から水産重要種の生物学的特性の把握の一環で、スケトウダラの飼育手法を確立し、仔稚魚期の生残、成長に与える要因を解析しています。平成26年度からは、沿岸生物の資源・漁場管理手法の開発に関する課題にも参画し、飼育実験によってホッカイエビ、キュウリウオ、チカ、シシャモ、ニシンの生物学的特性の解明を行っています。

水産研究開発に従事して38年余となりますが、その間のほとんどを栽培漁業の研究開発、特に魚介類の飼育手法の開発に努めてきました。その中でも通算20年間勤務した厚岸庁舎(写真2)を去ることは寂寥の感がありますが、今後も冷水性の魚介類の飼育研究が続いて行くことを願っています。



写真1 保護育成礁から採集したケガニ



写真2 北海道区水産研究所厚岸庁舎全景

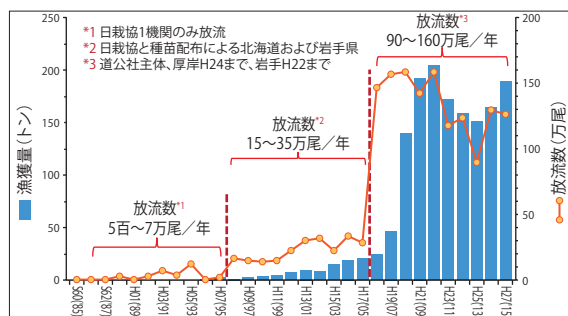


図1 マツカワの漁獲量と放流数の推移